

「四日市」の名は四が付く日に定期的に市が開かれていたのがその由来だ。室町時代、現在の鶉の森公園に城を構えた城主が、この地域を通る東海道を整備し、市場を開いたことがきっかけといわれている。

市内では現在、九つの定期市があり、ほぼ毎日、どこかで開催されている。

その一つである「三滝川慈善橋市場」を訪れてみた。大正11（1922）年から続き、市内で最も規模が大きい。毎月2、5、7、0の付く日の朝7時半から開催されている。

三滝川沿いに、その日に採れた野菜やその場でさばかれた鮮魚、できたてのおかずや手作りの漬物などを扱う店が40店ほど並ぶ。多くの店が建物の中で営業しており、雨の日でも快適に買い物ができる。

市内で二つの定期市を開催している四日市朝市協同組合によると、「定期市には、売り手と買い手が対面で言葉をやり取りする楽しさがある」という。それは通販やセルフレジが主流になってきたスーパーにはない強みだ。

四日市市は、定期市を市民の交流につながる買い物拠点として、その開催・運営を幅広く支援している。市のホームページでの出店者募集や定期市を紹介するパンフレットの製作、SNSでの情報発信などを行っている。

昨年11月には「塩浜市場」において四日市農芸高校の生徒による販売イベントも行われ、高校生が実習で製作したジャムやクッキーなどが販売された。こうしたイベントは高校生にとっても、気軽に消費者の反応を確認し、販売や接客の方法を学ぶ機会になるだろう。

若者から高齢者まで年齢を超えて始まる小さな交流から、地域の活力やまちのにぎわいが生まれてくるのではないか。定期市は、地域の買い物拠点のみならず、さまざまな世代の交流拠点としての役割が期待できる。訪れたことのない人も、少し早起きして定期市でいつもと違う買い物をされてみては。新たな楽しみが見つかるかもしれない。